

## 31日 土曜

### 伝道者の書



12:1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。  
12:2 太陽と光、月と星が暗くなる前に、また雨の後に雨雲が戻って来る前に。  
12:3 その日、家を守る者たちは震え、力のある男たちは身をかがめ、粉をひく女たちは少なくなって仕事をやめ、窓から眺めている女たちの目は暗くなる。  
12:4 通りの扉は閉ざされ、臼をひく音もかすかになり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちはみな、うなだれる。  
12:5 人々はまた高いところを恐れ、道でおびえる。アーモンドの花は咲き、バッタは足取り重く歩き、風鳥木は花を開く。人はその永遠の家に向かって行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。  
12:6 こうしてついに銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉の傍らで砕かれて、滑車が井戸のそばで壊される。  
12:7 土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。  
12:8 空の空。伝道者は言う。すべては空。  
12:9 伝道者は知恵ある者であった。そのうえ、知識を民に教えた。彼は思索し、探究し、多くの箴言をまとめた。  
12:10 伝道者は適切なことばを探し求め、真理のことばをまっすぐに書き記した。  
12:11 知恵のある者たちのことばは突き棒のようなもの、それらが編纂された書はよく打ち付けられた釘のようなもの。これらは一人の牧者によって与えられた。  
12:12 わが子よ、さらに次のことにも気をつ

けよ。多くの書物を書くのはきりがない。学びに没頭すると、からだが疲れる。

12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。

12:14 神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。

人生の最期について語られています。神などいなくても十分に生きていけると思っている人に対して、わざわいの日が来るのだと悟らせようとしているのです。その終わりが近づくなら、「何も喜びもない」という老後や死への思いを通り、そしてだんだん目が暗くなってゆくのです。

3節から5節は老いの子孫が記されており、そして「ついに（尊い）銀のひも」が切れるように、いのちの時が切れ、打ち壊されたいのちは元には戻りません。そしてどんな人生を送った人も、その体は土のちりに帰るのです。それを思うと人生は「空の空」としか言いようがありません。

しかし「伝道者」は神の知恵があったので、それで終わりませんでした。その知恵は神を知るという最も重要なことのために機能したのです。そして勧めます。「神を恐れよ。神の命令を守れ。」と。

私たちがこの際、人生の最後とその先の永遠を思いながら、神がいなければ「空」、しかしおられるので価値ある人生をみつめ直してゆきましょう。そのうえで、仕事、家庭、教会、勉強、人間関係などを、新たに主から受け取りなおしてゆきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

